



ルリオハチクイ *Merops philippinus* の日本初記録

山本裕¹・金田京子²・菊池健³

1. (公財)日本野鳥の会・〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23 丸和ビル

2. 〒100-1623 東京都八丈島八丈町中之郷2290

3. 八丈ビジターセンター・〒100-1401 東京都八丈島八丈町大賀郷2843

はじめに

ルリオハチクイ *Merops philippinus* は、ブツボウソウ目ハチクイ科に属する全長約29cmの鳥で、パキスタン北部、インド、ネパール、スリランカ南東部、ミャンマー、タイ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、フローレス、中国南東部、フィリピン、スラウェシ、ニューギニア東部、ニューブリテン等に広く分布する (del Hoyo *et al.* 2001, Phillipps 2009)。本種には、留鳥性のものと渡り性のものがあるとされ (吉井 1988)、分布の西側にあたるパキスタン北部やインド北部、ヒマラヤ地方では夏鳥で、パキスタンでは4月から10月には普通に観察されるが、南東方向へ移動する群れが見られること、また、スリランカでは留鳥も見られるが、むしろ冬鳥としてよく知られている (del Hoyo *et al.* 2001)。南北に長いタイでは留鳥以外に、夏鳥、冬鳥、通過個体が見られる (Lekagul & Round 1991)。マレーシアの海岸の平野部では8月から10月に群れが南下し、3月や4月にはマラッカ海峡を北上する群れが観察されるなど (del Hoyo *et al.* 2001)、分布地の多くの地域で季節移動を行なうことが知られている。分布の東側にあたり、学名の由来となっているフィリピンでは留鳥で (Kennedy *et al.* 2000)、分布の北限に近い台湾では、中国大陸に隣接する金門島に夏鳥として訪れるが、台湾本土では

北部で迷鳥として記録があるだけである (華民国野鳥学会 2009)。本来の分布地では、水辺に隣接する農耕地、樹林地の林縁、伐採地、マングローブ林などの汽水域、川や湖の岸辺、郊外の公園など、さまざまな環境に生息する (del Hoyo *et al.* 2001)。

今回、本来の分布地から離れた、伊豆諸島南部の八丈島において、ルリオハチクイ1個体を確認したので、以下に報告する。

観察日時、場所及び観察状況

ルリオハチクイが観察されたのは、八丈島南東部の末吉地区の山林 (33° 04' 43" N, 139° 50' 17" E) である。

2013年7月7日16時1分頃、都道215号を末吉地区から中之郷地区に向かって、著者の一人、金田が車で走行中に、電線に止まるヒヨドリよりやや小さめの見慣れない鳥を三原山側に発見し、その場でこの鳥の写真を撮影した (図1a)。その後、複数枚の撮影をしたが (図1b)、通りかかった車に驚き、北東方向に飛び去り見失ったため、観察を終了した。その間、約4分ほどで、撮影者から鳥までの距離は約15m、「ポー、ポー」または「グー、グー」というこもった鳴き声を何度か聞くことができた。当個体が観察されたのはこの時のみで、後日、写真をもとに、山本・菊池により種の同定を行なった。

2015年4月13日受理

キーワード：ルリオハチクイ, 日本初記録, 伊豆諸島八丈島, 迷行

観察環境

当個体が観察された環境は、耕作放棄地に成立した二次林中の道路際で、この二次林は樹高約7-8 mのオオバヤシャブシ、ハチジョウグワ、樹高約3-5 mのハチジョウキブシ、アカメガシワ、樹高約1-2 mのガクアジサイなどの落葉広葉樹から成り、その間にメダケも混じっている。また、道路から少し離れた場所では常緑広葉樹のスタジイも見られた。

同定

観察個体は、体の割に頭部が大きく、頸部は短かった。下方にやや湾曲した黒く細長い嘴と中央の長い尾羽が特徴的で(図 1a, 1b)、八丈島でよく観察されるほぼ同サイズのヒヨドリやアカコッコ、イソヒヨドリとは形態が異なり、その特徴からハチクイ科の鳥類であると考えられた。羽色は、頭部から背にかけて全体的に茶色がかかった緑色で、黒い過眼線の上部は水色、過眼線の下部はうすい水色、喉は茶褐色で、黒い横帯は見られなかった(図 1a)。また、足は短く、黒色であった。

del Hoyo *et al.* (2001) によると、ハチクイ科の鳥類は全世界で3属25種に分類されている。これらのうち尾羽の中央2枚が細長く突出している種は13種で、かつ、過眼線のある種は11種、さらに分布がアフリカに限定されている種を除くと、ミドリハチクイ *M. orientalis*、ルリホオハチクイ *M. persicus*、ルリオハチクイ *M. philippinus*、ハチクイ *M. ornatus*、ルリノドハチクイ *M. viridis*、ヨーロッパハチクイ *M. apiaster* の6種の可能性が考えられた。これら6種より、今回の観察個体をルリオハチクイと判断した理由を以下に述べる。

ミドリハチクイは、8亜種に分けられ、このうちユーラシア大陸には、*M. o. beludschicus*(イラク南部からインド北西部)、*M. o. orientalis*

(インド西部からバングラディッシュ、スリランカ)、*M. o. ferrugeiceps* (インド北東部と中国中央南部、ベトナム) の3亜種が分布する(del Hoyo *et al.* 2001)。これらの亜種は頭部から後頸部にかけてが黄褐色、もしくは黄褐色味を帯びる緑色、背面や腹部、喉が緑色で、喉と胸部の境界には黒い横帯が入り、また、全長16-18cmであり、ヒヨドリサイズよりやや小さいことから、今回の観察個体とは異なる。また、ルリホオハチクイは、黒色の過眼線があり、その周囲には白と淡い青色の羽毛があり、ルリオハチクイによく似ているが、全長約31cmとヒヨドリよりやや大きく、頭部や腰、尾羽を含めほぼ全身が緑色であることから異なる。ハチクイは、日本では、1904年7月に宮古島で観察されたことがあるが(日本鳥学会2012)、頭部が橙褐色、背面は緑色、喉は黄色で、胸部との境界に橙褐色と黒色の横帯がはいることから該当しない。ルリノドハチクイは、2亜種に分けられ、このうち *M. v. viridis* は、中国南東部(海南島を含む)、タイ南部からインドシナ南部(ラオスの大部分を除く)、スマトラ島、ジャワ島、ボルネオ島、ナツナ島北部に、もう一つの亜種 *M. v. americanus* はフィリピンに分布するが(del Hoyo *et al.* 2001)、*M. v. viridis* は、頭部から背面が茶褐色で、喉は淡い青色、胸部と腹部は緑色、*M. v. americanus* は、頭部から背面が赤褐色みが強く、頬がうすい水色、喉は緑色であることから当てはまらない(なお、Clements *et al.* (2014) によると、亜種 *M. v. americanus* は独立種 *M. americanus* として扱われている)。ヨーロッパハチクイについては、頭部から背中にかけて茶褐色で、喉が黄色、そして、喉と胸部の境界には黒い横帯が入ることから除外される。

以上のように、羽色の特徴と他種との相違点から、今回の観察個体をルリオハチクイと判断

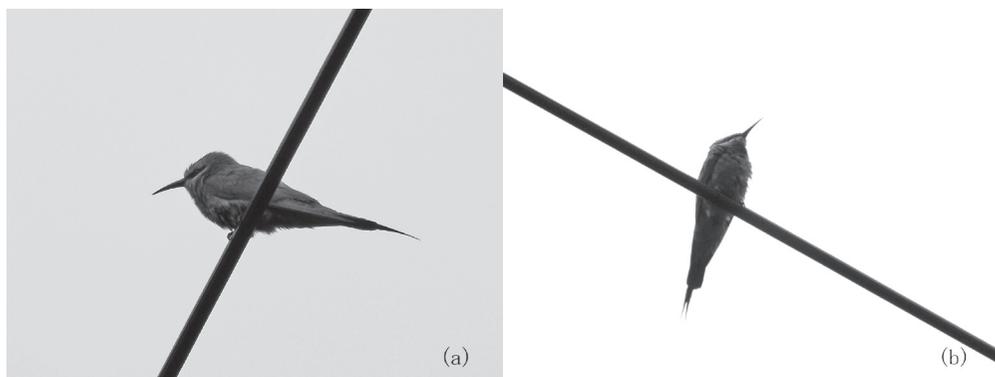


図1. (a) 八丈島で観察されたルリオハチクイ, (b) 腹側から撮影した同個体. (撮影: 金田京子 2013年7月7日)
 Fig.1 (a) Blue-tailed Bee-eater, *M. philippinus*, observed at Hachijo-jima Island on 7 July, 2013 and (b) Ventral view of the same individual. (Photographed by Kyoko Kaneda).

した。年齢については、尾羽の中央部2枚が突出していることから(図1b)、成鳥であると考えられた(Robinson 1927)。

考察

ルリオハチクイの本来の分布地のうち、今回観察された伊豆諸島の八丈島に近い地域としては、中国の福建省沿岸部や台湾の金門島が挙げられ(del Hoyo *et al.* 2001, 中華民国野鳥学会 2009), このうち最も近い金門島とは約2300km 離れている。

観察当日の天候は曇りで、気温は約25℃であった。7月上旬の八丈島は例年梅雨末期にあたり、7月1日と2日には、八丈島の南方に発生した小さな低気圧によって一時期北東からの風が吹いたものの、概ね本州から東北地方に停滞する梅雨前線に吹き込む風速約5m/sの南西からの風が主で、それほど荒天候ではなかった。

当個体が、本来の分布地から離れて迷行した理由は明らかでないが、一つの要因としては、6月27日にフィリピンの東側海域で発生した

台風第6号(1306)の影響が考えられる。この台風は、6月29日から30日にフィリピンを横断し、南シナ海へ移動したのち、7月2日には中国南部に上陸した。台風と太平洋高気圧に挟まれた地域では、当時、強い南風が台湾から沖縄方面へ向かって吹いたと考えられ、その風によって北上したこの個体そのまま、高気圧の縁に沿って日本列島付近に停滞する前線に吹き込む風により、当地まで運ばれた可能性が推測される。

観察個体が、電線に止まっている時に「ポー、ポー」または「グー、グー」というこもった声を聞くことができたが、ルリオハチクイの鳴き声としては、飛びながら澄んだ声で「チャッ、チャッ」と鳴くことや(Kennedy *et al.* 2000), 「ビリリッ、ビリリッ」、「リリッ、リリッ、リリッ」と鳴くことが報告されているが(Tan 2001), 今回のようなこもった声は観察されておらず、今後、本来の分布地での情報の蓄積が望まれる。

なお、本種の和名は、ルリオハチクイとハリオハチクイが混在しており(亀谷辰朗, 田仲

謙介私信), 内田・島崎(1987)では, ルリオハチクイ, 山階(1986), 吉井(1988)では, ハリオハチクイ, 白井(1992)では, ハリオハチクイ=ルリオハチクイと表記されている。本報告では, 前原(2014)の編集部注で, 亀谷氏が指摘されているように, *M. philippinus*の英名がBlue-tailed Bee-eater(青い尾をしたハチクイ)であること, また, ハチクイ類には中央の尾羽が長く突出している種が複数あり, 「ハリオ」という言葉を特定の種の和名に使うのはふさわしくないと考えられること等から, ルリオハチクイの和名を用いた。

本稿作成に際しては, (公財)日本野鳥の会の安西英明氏より文献を紹介いただいた。また, 本種の和名の混在については, 亀谷辰朗氏と田仲謙介氏よりご指摘をいただき, 特に亀谷氏からは混在の経緯と整理状況について情報をいただいた。BirdLife InternationalのSimba Chan氏及び匿名の査読者2名からは有益なご助言をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

引用文献

- Chinese Wild Bird Federation(edit.). 2009. A Photographic Guide to the Birds of Taiwan(邦訳「台湾の野鳥300図鑑」). pp.334. 中华民国野鳥学会, 台北.
- Clements, J. F., T. S. Schulenberg, M. J. Iliff, D. Roberson, T. A. Fredericks, B. L. Sullivan, and C. L. Wood. 2014. The eBird/Clements checklist of birds of the world: Version 6.9. Downloaded from <http://www.birds.cornell.edu/clementschecklist/download/>
- del Hoyo J., Elliott and Sargatal J. (Eds.) 2001. Handbook of the Birds of the World. Vol. 6. Mousebirds to Hornbills. pp.589. Lynx Edicions, Barcelona.
- Kennedy R. S., Gonzales P. C., Dickinson E. C., Miranda, H. C. Jr. and Fisher T. H. 2000. A Guide to the Birds of the Philippines. pp.369pp. Oxford University Press, Oxford.
- Lekagul B. and Round P. D. 1991. A guide to the Birds of Thailand. pp.457. Saha Karn Bhaet Co., Ltd., Bangkok.
- 前原昌義. 2014. 2014年日台共同鳥類標識調査の概況報告. バンダーニュース 55: 9-18.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. pp.438. 日本鳥学会. 三田.
- Phillipps Q. 2009. Phillipps' Field Guide to the Birds of Borneo. pp.366. Beaufoy Books, Oxford.
- Robinson H. C. 1927. The birds of the Malay Peninsula. Vol. 1: The Common Birds witherhy, London.
- 白井祥平(編著). 1992. 世界鳥類名検索辞典・和名篇. pp.396. 原書房, 東京.
- Tan, R. 2001. Merops philippinus. Mangrove and wetland wildlife at Sungei Buloh Wetlands Reserve, Singapore.http://www.naturia.per.sg/buloh/birds/Merops_philippinus.htm. Viewed March 2015.
- 内田清一郎・島崎三郎. 1987. 鳥類学名辞典. pp.1207. 東京大学出版会, 東京.
- 山階芳麿. 1986. 世界鳥類和名辞典. pp.1140. 大学書林, 東京.
- 吉井正(監修). 1988. コンサイス鳥名事典. pp.588. 三省堂, 東京.

The first record of a Blue-tailed Bee-eater *Merops philippinus* in Japan

Yutaka Yamamoto¹, Kyoko Kaneda² & Ken Kikuchi³

1. Wild Bird Society of Japan. Maruwa Bldg, 3-9-23 Nishi-gotanda, Shinagawa-ku, Tokyo 141-0031, Japan
2. 2290 Nakanogou, Hachijo-jima, Tokyo 100-1623, Japan
3. Hachijo Visitor Center. 2843 Ogago, Hachijo-jima, Tokyo 100-1401, Japan

We observed a Blue-tailed Bee-eater *Merops philippinus* on 7 July 2013 in Hachijo-jima Island, southern Izu Islands, central Japan. The individual was perched on an electric cable at the edge of a forest. It had greenish brown plumage, a black eye stripe, a pale blue moustachial stripe and a long black bill. Since the bird had elongated central tail feathers typical to bee-eaters, it was assumed to be adult. This is the first record of a Blue-tailed Bee-eater in Japan, which probably visited the island accidentally.

Keywords: Blue-tailed Bee-eater, Merops philippinus, First record, Izu Islands, Hachijo-jima Island, accidental visitor